

八尾中学・第36期の大先輩、大田堯氏の「映画と講演の集い」が平成23年11月5日(土)に大阪で開催されました。
(定員350名に1,400名の応募がありました。)

朝日教育講演会

大田 堯さんを迎えて

(93歳・教育研究者)

「映画と講演の集い」



この映画ならびに講演によって、戦後60数年に及ぶ先生の活動とその原点は何か、視聴者は大きな感銘を受けました。
先生のドキュメンタリー映画の内容とメッセージをレポートに代えてここに掲載します。

ドキュメンタリー映画

かすかな光へ

製作・著作：ひとなるグループ

監督：森 康行

音楽：林 光

詩：「かすかな光へ」作・朗読 谷川俊太郎

ナレーション：山根基世／朗読：津嘉山正種ほか

2011年／84分／DV／4:3／カラー／日本／ドキュメンタリー

配給：ウッキー・プロダクション

作品解説

戦前戦後を通して、日本の社会と人間の肌につれ、今年93歳を超えた教育研究者、大田堯。東京帝国大学の大学院生から、一兵卒として召集された戦争体験。そこで待っていたのは36時間の生と死が交錯する漂流、生きる力を試されたジャングル生活。

生活に根ざした知恵と力を身につけた農民兵、漁民兵などの労働者との出会い。

「教育によって愚劣」になった知的エリート。植樹の知識から実生（みしょう）の知恵への再生を願望。ここから人間にとって「教育」とは何かの終生に及ぶ問いかけが始まる。

敗戦直後、さまざまな職業の地域住民の参加で行った広島県三原市本郷町での地域教育計画。「民衆の学校」を目指した試みも朝鮮戦争による日本の逆コースへの転換によって挫折。そして、村で失意の状況におかれた「不良青年」たちとの共同学習、国益本位の教育施策、国を被告とする家永教科書裁判、その他での挑戦。大田堯の人生は、日本の戦後と真正面から向かい合っていく。

その中でつかんだ教育とは、生物としての人間、誰でもがもつ細胞の中のユニークでダイナミックな人生設計図の開花を援助し、励ます環境を創り出すこと、演出活動であり、アートだという。従来の上から教えて、知識注入、あわせて変心、同化を求めるといった既成の「教育」の観念を根底から覆すことをめざしてきた。

いま人生の最終段階で、法の「想定外」の重い障がい者が自ら好んで社会的に価値あるものを創り出す福祉施設「川口太陽の家」と出会う。そこで思春期を過ぎた障がい者が、感性、心と心のひびきあいの中で一人の労働者として生きる協同の姿にふれる。その施設の北東には人口200万の都市社会の只中に1260haの広大な緑地がある。そこをフィールド・ミュージアムとして保存、活用、そこでの新しい人間関係の創造へとつなげる。その憧れは、ヒトのおどり、マネーや科学・技術の成果など、無機的なものへの過信を抑えて、自然の摂理にそった“生命あるもののきずな”の再生へと向かう。

かわる

かかわる

ちがう

人と人、人と自然とを結ぶ

無縁社会 不安と混乱の時代

私達は何を手がかりとして生きていくのだろうか

— 93歳の教育研究者・大田堯の挑戦



教育とは命と命のひびきあい 創造活動・アートなんです



監督 森 康行 詩 「かすかな光へ」作・朗読 谷川 俊太郎

かすかな光へ

制作・著作：ひとなるグループ 音楽：林 光 ナレーション：山根 基世 朗読：津島山 正種ほか 撮影：西島 周宏、前川 元生、川越 潤彦、野間 健、梅村 龍男
編集：古賀 陽一 音響効果：八雲啓 健二 録音：東京テレビセンター 2011年・84分・DV/4.3・カラー/日本/ドキュメンタリー 配給：ウシキョープロダクション

<http://kasuka-hikari.com/>



生きるとは、 学ぶとは――

93歳、夢とあこがれを語る

ふと我にかえると、現実は無機物に開い
込まれた荒涼たる世界を、愛に飢えた
人影がバラバラに生きています。そういう
風景が幻のように見えるのです。私はそ
の現実の中に垣間見えるかすかな光への
道を手さぐりで求めようと思いました。
それは夢のようなもの、あこがれにすぎ
ないのかもしれませんが、そのあこが
れ、夢なしには私にはどう生きるかの手
がかりを見出すことはできないのです。
その手がかりを見つけるために、私は自
然から預かった生命という摩訶不思議
なものに注目してみました。

〈大田堯著「かすかな光へと歩む」より〉

エデュケーション＝教育は
誤訳じゃないかと思ってるんです



挫折したエリート

一兵卒として体験した戦争。そこで待っていたのは36時間の生と死が交錯した漂流。生きる力を試されたジャングル生活。生活に根ざした知恵と力を身につけた農民兵、漁民兵などの労働者との出会い。ズタズタにされたプライド。「俺は一体、何のために生きているんだ!」

再生へ

敗戦直後、さまざまな職業の住民参加の中で取り組んだ“民衆の学校”づくりとその挫折。そして、自ら働く人たちのなかに飛び込んでいった共同学習―それは村の「不良青年」と生活を共にし、学ぶことを通して、初めて心と心が通った学習体験だった。

無縁社会と呼ばれるなかで

社会も教育の姿もガラリと変わった高度経済成長時代一國を被告とする家永教科書裁判、そして、人間の絆が断ち切られる孤独化現象。大田堯の人生は戦後と真正面から向かい合っていく。そのなかでつかんだ教育とは、「教養育てる」という従来の教育観を根底から覆すものだった。そして大田はいま、自然の摂理にそった生命あるものの絆の再生をめざす。

題名の「かすかな光へ」は谷川俊太郎の同名の詩から名づけられた。また、この詩の朗読は詩人自ら行っている。音楽監督は、「裸の島」「一枚のハガキ」(新藤兼人監督作品)など、多くの映画音楽をてがけている林光。監督は、高知の高校生の平和学習を記録した「ピキニの海は忘れない」(1990)、「渡り川」(1994)、夜間中学を記録した映画「こんばんは」(2003)など、青春と学びを描いてきた森康行。編集は、森の21年前の監督作品からすべてにかかわっている古賀陽一が担当した。

「違っているんだよ」じゃなく
「違う」んです



監督 森 康行

かすかな光へ

制作・著作：ひとなるグループ 監督：森 康行 音楽：林 光 詩：「かすかな光へ」作・朗読 谷川 俊太郎
ナレーション：山根 基世 朗読：津島山 正輝 ほか 撮影：西島 賢宏、前川 光生、川越 道彦、野間 健、梅林 陽男
編集：古賀 陽一 音響効果：八重役 健二 録音：東京テレビセンター
2011年 / 84分 / DV / 4.3 / カラー / 日本 / ドキュメンタリー 配給：ウッキー・プロダクション

親の
子どもは
私物ではない

映画HP <http://kasuka-hikari.com/>

自主上映団体募集中

【お問い合わせ】ウッキー・プロダクション(鎌田)
〒102-0074 東京都千代田区九段南4-3-3 シルキー・ハイブ九段南2号館606号室
TEL: 03-5213-4933 FAX: 03-5213-4934 yus@solid.ocn.ne.jp

とうろう 「螻蛄(かまきり)の斧」

3.11 東日本大震災は、私たちの映画の内容がようやく出来上がった後での衝撃的な出来事でした。多くの生命が失われ、資財も無に化することになりました。人々は「これからどう生きるか」の深刻な問いに直面しています。私は、今回の事態が想定外の自然の力の働きがきっかけとなったとはいえ、原発を含む明らかな人災によるものであると考えています。「これからどう生きるか」の問いは、直接罹災した人たちの問題にとどまることなく、日本人、いや世界の人々への問いかけであると考えます。

今回の罹災の現場では、まず自分の生命をどう守るかの問いとともに、「誰が、どこに」の問いが切実なものとして人々の間にあったはずです。我が子の消息を知ろうと、敢えて引き返して、津波にさらわれたお母さんの出来事には、胸に突き刺さるような衝撃を受けました。生命のきずなのむごい断絶です。

それにつけても思うことは、こうした悲劇的な事実にはるかに先立って、生命と生命のきずなの危うさは、現代社会の現実として、潜在的に日常化していたということです。つまり、モノとカネ優先の社会では、地球上の自然破壊が日々進行し、人間関係はごく身近なところから疎遠になり、互いに自分を見失うという事件が日常生活の中で、次々に発生していたのです。おそらく貧富、生活信条の格差に根ざすテロ、弱者（子どもを含む）への虐待、動機不明の重大犯罪、自殺などなど数えればきりがありません。

今回のような事態の背景には、自然の摂理へのヒトという動物のおごりがあってきたこと、それらに対する深刻な反省なしに、モノとカネによる「復興」がおこなわれたとしても、生命と生命のきずなの危うさは、取り残されたまま、更なる悲劇を招くことになりかねません。

モノとカネの支配下にあるこの現実を、自然から与えられた生命と生命のきずなによるセーフティネットに根ざしたものに建てなおすことは、次世代に対する、私たち世代の責任だと考えます。この映画では、このきびしい現実に対して、できるだけ身近なところから、挑戦を試みる年老いた研究者の夢を描きだしていただくことになりました。

「ちがうこと」「自ら変わること」、そして「かかわること」、およそすべての生きもののそなえた生命の特質を手がかりとして、人間の尊厳、基本的人権を軸とするセーフティネットの創造につなげることで、モノとカネが支配する社会に、何とかくさびを入れる、そういう夢を持ちつづけてきました。その挑戦は、巨人に挑む「螻蛄の斧」にも似た途方もないことなのかもしれません。

これまでのところ、ささやかな一つ一つのころみも成功の手ごたえを得たとまで云えるほどのものはありません。それでも、きびしい現実にとりくむ人々に思いをはせながら、そのかすかな光をめざした一歩々々の中で、快く夢を分かち合う多くの仲間と一日々々を過ごしております。

この映画を通じて、一人でも、二人でも新しい仲間ができることで、残り少ない余生を送ろうと思っております。